

再考 法隆寺献納宝物「海磯鏡」

植松 勇介

東京国立博物館に保管される海磯鏡二面（以下、A鏡・B鏡）は天平8年（736）光明皇后が法隆寺に寄進したものと推定されている。共に40センチ超の大型鏡であり、面径や背面の図様がほぼ等しいため、早くから注目されてきた。海磯鏡の研究には主に二つの論点がある。すなわち、二面の関係と铸造方法、そして、図様の意味である。本発表ではこれらの論点について私見を述べたい。

A鏡とB鏡の図様は周縁に近い部分では一致するが、中心部では差異が認められる。波涛文に注目すると、B鏡のものが全面に同じ調子で展開するのに対し、A鏡は周縁部と中心部で統一性を欠く。先行研究においてこうした状況は踏返铸造により生じたと指摘されている。一方を凸型とし、これを真土で型取りして凹型を作成したが、凹型の中央部が破損したため、補修の上、鑄込みを行ったという解釈である。二面の先後関係については先学の見解も分かれるが、B鏡が先、A鏡が後と発表者は考える。A鏡における図様の不統一は鑄型補修の結果だろう。もっとも、B鏡すら踏返鏡の可能性もある。海磯鏡の鈕は無文の半球形だが、正倉院の南倉4号鏡のようにその類例では鈕に山岳文を表すことが一般的である。また、南倉4号鏡では鈕の周囲に海磯鏡と同じ鱗状文が見える。しかし、南倉4号鏡の鱗状文は海磯鏡とは逆に左へ巡る。南倉4号鏡、海磯鏡とも波涛文は左回りなので、鱗状文と波涛文の一体感は海磯鏡より南倉4号鏡が強い。海磯鏡には鈕に山岳文を表し、鱗状文も左に回転する原型鏡の存在が想定できよう。B鏡でも踏返铸造の工程で鈕とその周囲が改変されたと考えられる。

背面の図様に関してはこれまで波涛文を海と見なすことが多かった。周縁から中心に向かって屹立する山岳文を蓬萊など海中に浮かぶ神山とする見解もある。しかし、図様を詳察し、類例を参照すると、従来の解釈に疑問が浮かぶ。

発表者がまず注目したのは皮袋に乗ると見なされてきた人物である。四足獣の皮を用いた浮袋は古くからあるが、この人物が乗るものは突起部が一端に偏り、形状も空気が充満しているようには感じない。むしろ、突起部は枝を、しわ状の描写は樹皮を思わせる。彼が大樹の一部に乗っているとすれば、前漢の張騫が槎（浮木）に乗って黄河を遡上し、天界に至ったという『荆楚歲時記』所載の伝説が想起される。また、苦舟から釣糸を垂らす漁夫と山腹に座して漁夫に視線を送る人物についても漁夫が川を遡上して仙境に迷い込む奇譚を踏まえているのではないか。陶潜の『桃花源記』がそうした奇譚の好例だろう。さらに、陝西省西安市長楽坡で出土した海磯鏡の類例には巨魚に乗る人物が表されている。『列仙伝』によれば、趙の琴高は龍の子を捕らえると言って傷水に潜り、赤い鯉に乗って現れたという。以上の点から、海磯鏡の図様はもともと川にまつわる奇譚をちりばめたものと考えられる。

（うえまつ・ゆうすけ）